

大きな愛に国境はない

中国人民大学学生代表

見学日時：2017年6月5日（月）12:00-13:30

見学場所：日比谷松本楼

見学概要



日比谷公園にある松本楼は周囲の緑により引き立ち、こうして100年以上経営されてきた。訪日団一行は松本楼の外観を觀賞し、本格的な西洋料理を堪能し、松本楼社長からの梅屋庄吉氏と孫中山氏の過去の出来事についてのお話を拝聴した。社長のお話により私たちは、この小さな松本楼と歴史的な関係がある梅屋庄吉氏と孫中山氏の事績について知った他、お話を通じて「大きな愛に国境はない」とは何なのかについて知ることができた。

なぜですか？

問：松本楼がある公園の歴史及び他所との違いは？

答：松本楼のある日比谷公園は日本で最初の洋風近代式公園であり、また日本が初めて建造した公園である。日本の歴史においては、それまで独立した公園というものはなく、多くが寺院や神社の境内を公園化したもので、1873年(明治6年)に、日本に公園制度が生まれた。そして紆余曲折を経て日比谷公園は1902年(明治35年)に正式に着工し、翌年に開園された。

問：梅屋庄吉、孫中山両氏と松本楼との関わりは？

答：松本楼のオーナーは梅屋庄吉氏ではない。1903年(明治36年)、日比谷公園が西洋風の公園に倣い公園内にレストランを建設し、当時の貴族議員であった小坂梅吉氏が公開入札により経営権を獲得した。孫中山氏が日本を訪れた際は、梅屋庄吉氏と幾度も松本楼を訪れ、各界の有力者や志士と関係を深めた。その後、小坂梅吉氏の孫と梅屋庄吉氏の孫娘が縁組みを、また孫中山氏と宋慶齡女史が梅屋庄吉氏の仲立ちにより結婚し、宋慶齡女史は自らが愛用した現存する日本最古のヤマハピアノを松本楼に寄贈し、現在も1階ロビーに展示している。また松本楼の現社長は梅屋庄吉氏の曾孫である。現在では梅屋庄吉、孫中山両氏の名は、松本楼と切り離すことができないものとなっている。



感想

今回松本楼を見学して、日比谷公園の美しさ、松本楼の威厳、本格的な西洋料理の美味しさ以上に、梅屋庄吉氏の心の広さ、その国境を超越した大きな愛そして社会全体また人類全体への思いやりが私たちにとって印象深いものであった。

裕福な家庭に生まれた梅屋庄吉は、本来おしゃれで気ままな一生を過ごし、贅沢を尽くすことができたが、彼は幼いころから貧しい人々を思いやっていた。彼はチャレンジ精神に富み、14歳にして船で上海に赴き、当時賑わっていた上海租界における西洋の列強の鼻高々な様子と中国の人々の地位の低さとの違いを目にし、中国民族の発展の手助けをしたいとの思いが生まれた。1895年、香港で孫中山氏と知り合って以降、二人は意気投合し、その後梅屋庄吉氏は全力を挙げて孫中山氏の革命への資金援助を行い、中国の革命事業における自らの貢献をした。

日中両国に関して、確かに歴史的には友好的な付き合いがあり、また戦争の時期もあった。友好的な時期における交流については平和環境における交流と言えるが、梅屋庄吉氏が戦争時期において一日本国民として孫中山氏の手助けをし、中国の救済のために力を尽くしたことは、その先見性の高さが感じられる。梅屋庄吉氏は一国の視点で問題に対応するのではなく、彼は社会全体そして人類全体の視点から考え、孫中山氏に対し国境を超越した手助けをしたのである。

その一方で、現在、私たち大学生は勤勉さこそあるが、信念が欠けているようである。キャンパスでの私たちは、ほしいままに青春の素晴らしさを謳歌しているが、それと同時に多くの時間が無駄に流れている。今日では報国の志を立てることは稀なこととなっており、真に天下のため志を立て、平民のため天命を全うし、聖人のため孔孟の教えを継続し、万世のため太平を構築する人はほとんどいない。そしてこうした責任は私たちにも掛かっているのだろうか。国籍や専攻を問わず、高等教育を受けている、特に中国国内での一流とされる大学の学生としては、社会、世界、人類についての思いが心に少しもなければ、それは自分の学問に申し訳が立たないのではないだろうか。これは私たち各人がそれぞれの分野における大人物にならなければいけないということではなく、心に「社会をより良くする」という思いを持ちながら学習や仕事をすることで、功績や業績の如何を問わず、21世紀における大学生の身分に恥じないようにするということである。自分の全てを捧げるとまではいかなくとも、最低限個人の目標を追求すると同時に社会全体そして人類全体にわずかでも利益をもたらすことが大切である。

梅屋庄吉氏の国境のない大きな愛は、彼の責任感そして自身の使命感への認識を示している。私たち若者も彼に学び、自分の社会的責任感を高め、その大きさを問わず自分の使命と向き合わなければならない。